

やはり俺の異世界転生は命がけだ

ピーターパンシンドローム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

卒業旅行中に八幡達はハイジャックにあう。
異世界転生ものです

目次

比企谷八幡は決意する。

第10話	44
第9話	38
第8話	33
第7話	28
第6話	24
第5話	19
4	13
3	7
2	4
1	1

比企谷八幡は決意する。

1

「…ん…まん！はちまん！」

心地よい声に目を覚ます。すると、窓越しに雲が見え、顔を正面に向けると戸塚が頬を膨らめさせて俺のことを揺すっている。なにこれかわいい。ああ、なるほど、ここは天国か。雲の上だし、トツカエルモいるしね！

「先輩、顔緩みきつていてキモいです」

…訂正。俺の左隣に小悪魔がいる。ここ天国じゃねえじゃん。

「なんでお前もいるの？」

「あー！ひどいです！私は葉山先輩に許可もらったからいいんです！」

そう言つて一色は頬を膨らませる。なにこれあざとい。

受験も無事に終わり、それぞれが進路を決めたこの3月に、われらが総武高校は毎年卒業旅行というものがある。しかしこれは学校主催ではなくあくまでも生徒主催のイベントである。よつて俺はそんな物には参加せず家でゴロゴロしたらすると心に決めていた。

…はずだった。

俺が部室で卒業旅行には行くつもりがないと言ったら雪ノ下と由比ヶ浜が捨てられた子犬のような目をし、その日家に帰ると

「ごみいちゃんがいかないなら、小町もう口きかないからね！」

と小町に告げられてしまったのだ。

よくよく話を聞くと雪ノ下と由比ヶ浜から小町に連絡があったとか。

そうして俺の包囲網（小町）が完成したのだ。

…やだ、俺の包囲網狭すぎ!?

そんなこんなで今は飛行機の中である。

この飛行機には総武高3年生十一色だけではなく、一般の人も乗っている。だからあまり大きな声で話すこともできないのだが…

「隼人くーん、俺まじ、沖縄とか初めてっしょ！めっちゃ楽しみだわー！」

「戸部、うつさいしー！」

斜め前にいる葉山グループは相変わらずのハイテンションだ。てか戸部、お前俺が寝る前からずっと三浦に注意されてないか？

「沖縄…ヒキガエル君は紫外線対策は大丈夫かしら？」

「ちよつと、雪ノ下さん？俺が沖縄の太陽で干からびると言いたいんですか？」

「あら、干からびるだけじゃないわよ？殺菌されないようにもしなければね、比企谷菌。」

「今日は俺のトラウマのオンパレードですか…！」

いつもより饒舌な雪ノ下は口角が上がりきっている。こいつもこいつで楽しみなんだな。

しばらく雪ノ下たちと話していると、俺の席の側の通路に黒いコートを着た体格のいい男が歩いてきた。その男はコックピットの前で立ち止まりこつちを振り向いた。

次の瞬間、

「動くんじゃないえー！これからこの飛行機は〇〇に墜落させる！」

男は銃を客席に向けながら怒鳴った。

おいおい…なんで銃なんて持ち込ませてんだよ…

落ち着け、まずは状況確認だ。

周りを見ると、戸塚も一色も、あの雪ノ下さえ体を小さくさせて震えている。無理もないな…俺だってかなり怖い。ふと、斜め前を見るとあるやつが此方を見ている。

ー葉山だ

その目を見て葉山が何をやろうとしているのか分かった。ああ、やっぱりこいつは本物のイケメンだな…

side 葉山

優実子も結衣も姫菜も今にも泣き出しそうだ。戸部はそんな姫菜の肩を抱き寄せ、大丈夫と繰り返して慰めている。

くそ、このままだとみんな墜落で死ぬ…

なにかみんなを助ける方法はないか!?

こんな時、比企谷はどうやって行動するのだろうか？俺はあいつの席をこっそりと見る。しかしあいつの席をの近くで雪乃ちゃん怯ええる姿が眼に入ったその時、全身に一気に血がまわり覚醒していく。

ああ、今度こそ俺は間違えない。

――俺は葉山隼人のやり方で、雪乃ちゃんを助ける。

side 八幡

黒服が来てから30分はたった。

「雪ノ下、一色、戸塚、少し待っててくれ」

「「え？」」

3人は顔面蒼白で此方を見ているが、もう時間的猶予はないからこつちから動くしかない。

俺は葉山側の通路の反対からしゃがんで様子を見る。黒服の男は無線のようなもので誰かと連絡を取っているようだが、なかなか隙を見せない。

どうする!?!これ以上はいつ墜落するかわからない…

葉山の方を見るとあいつもしゃがんだままでなかなか動けないようだ。葉山はもう一度こつちを見て笑ってみせるとクラウチングスタートの体制をとった。

おい：それはやめろ!!

俺は必死に目で訴えるが、あいつはまるで弾丸のように黒服に飛び込んでいった。

side 葉山

もうこれ以上はいつ墜落するかわからない。

俺の頭かなり冷たくなっていた。ここで残された一手はー

俺は比企谷と目を合わせ、笑ってみせる。

一呼吸して、黒服に向かって飛び出した。

黒服はまだ無線に気を取られており、俺との距離は3メートル程度!

俺はさらに速度を上げる。

あと2メートル!

もつと速くだ!

さらに強く踏み込もうとした時、

「葉山くん!？」

視界の隅で少女が俺の名前を叫んだ。

俺はおもわず渴いた笑いが出る。

ああ、やってくれたな…相模さん…

「なんだテメエ！」

そして銃声が俺の耳を木霊した。

目を覚ますと天井がかなり高いところにあつた。俺は身体をなんとか起き上がらせ、まわりを一瞥すると見知った顔が白いタイルの床に倒れていた。

1-2年F組のみんなだ。

…あと雪乃ちゃんというはもいるな。

side 八幡

ゆっくり目を開けると、由比ヶ浜、一色、雪ノ下が今にも泣き出してしまいそうな顔を覗き込んでくる。

由比ヶ浜は実際少し泣いてるな、うん。

「ヒツキーやっとおきたー！」

俺はまだ寝ぼけている頭を持ち上げまわりを見る。

これは…宮殿というやつか？

床から天井まで白い石のようなもので統一されており、壁には騎士の鎧が置いてある。

俺は確か飛行機に乗ってて…これは助かったのか？

俺は必死に状況を整理していると祭壇の横の扉が開き、中から銀髪の美女がでてきた。銀髪は腰まであり、鼻は筋が通っており、目は切れ長である。隆起の大きいボディラインが強調されるような白いドレスを身に纏い、煌びやかな宝石を散りばめた髪飾りをつけている。

絶世の美女や傾国の美女とはまさにこの女性を指すのであろう。

俺だけではなく、周りの奴らも彼女に数秒の間目を奪われ続けた。すると、彼女は宮殿に響く声でこう告げた。

「あなた達は一度死んでおります。しかし、もしももう一度あの世界に戻りたいのならこの世界の魔王を倒してください。」

はあ？俺たちが死んでる？何言ってるのこの子？電波か？

周りが一気に騒がしくなる。

「みんな！俺たちで協力して元の世界に戻ろう！」

おい、葉山までなにいつちやってんだよ！もつと人を疑うことを知ろうよ！

すると周りは目に見えるように葉山の言葉に賛同していく。

はあ、なんなんだこいつら。あれか、思考をすべて葉山に丸投げつてやつか。

「おい、ちよつと待てよ。そんなすぐ信じられるかよ。そもそも俺たちは死んでもいない。そんだけ言うんだったら証拠だせ証拠。」

俺が少し強めの口調で言うと、周りは急に静かになり、何人か俯いてる。

すると葉山が気まずそうな顔を押しつけて告げた。

「君が証拠だ」

は？どういう意味だ？

ー俺がそう言うおうとした時、

「君は確かに死んだんだ」

ああ、そうか、俺はあの時死んだのか。

side 八幡

葉山が黒服に向かって走り出すのに少し遅れて、俺も低い姿勢で黒服に向かって走った。いくら葉山が運動神経抜群でも、あの体格でしかも銃を持っている男を取り押さえなんて無理だ。そう考えた俺は少しでも葉山のサポートをしようと動き出したのだ。普段の俺ならまずこんな行動はしないだろう。ましてや、イケメンリア充の葉山のサポートなんてごめんだ。

だが、今回は俺と葉山の目的は一致した。

ー雪ノ下達を守ること。

俺はやつと見つけた本物のを守りたい。

そう考えながら、姿勢を低くして、音を立てず、俺は小走りで距離をつめていた。

ちらりと、葉山の方を見るそのとき、

「葉山くん!？」

相模の叫び声が聞こえた。

まずい!

いま黒服に気づかれたら葉山は撃たれる!だが、俺は黒服を取り押さえざるほどの力はない:

…そしたらやれることは一つしかねえじゃねえか。

俺がいつも使ってきた、たった一枚しかない手札。

「おらああ!!！」

俺は周りの注目を集めるように大声をあげて、黒服に殴りかかった。

side 葉山

比企谷に飛行機の中での事を説明した。

比企谷が撃たれたこと。

黒服をその後に取り押さえられたこと。

そして、その直後に飛行機が墜落したこと。

すべての事を話し終えた時、彼の顔は酷く哀しい顔をしていた。無理もないだろう。誰だって突然に訪れた自分の死をすぐには受け入れられない。俺は、機内で何度も死を覚悟した。きつと、他のクラスメイトもそうだろう。だから、銀髪の女性の話を聞いた時、俺達はむしろ安堵したのだ。もう一度生きることができると。だが、比企谷はそうではないだろう。おそらく彼は自分の死があまりにも唐突で死んだ事を理解できていなかった。そうすれば何かしらのショックを受けるのが普通だ。

「では、皆さん。こちらへどうぞ」

銀髪の美女に連れられ、俺たちは玉座の間に案内された。赤いカーペットが敷かれ、一本の道を作るように剣や鎧で武装した騎士が道を作っている。そして正面には金をベースに宝石で装飾された椅子が一脚置いてある。銀髪の美女はそこに座ると透き通った声で、話を始めた。

「先ほどは突然の無礼をお許してください。私の名はソフィア。この世界の女王です。」

俺は先ほどから疑問に感じていたが、あの場では言うべきではないと判断していた質問をした。

「ソフィア様。僕達に魔王を倒せと仰いましたが、もともとただの青年です。何故、僕達を選ばれたのでしょうか？」

ソフィア様は俺達を見て、嬉しそうにうなずいた。
「あなた方の世界の住人は、元々かなりの魔力を持っているのです。それも、王家直属の騎士と同じくらい。なので、是非力を貸していただきたく、こちらにお呼びいたしました。」

「なるほど。しかし、向こうの世界の人間は他にもいるでしょうか？」

「それに関しては、私達の召喚魔法の性質の問題なのです。この召喚魔法では、魔法を発動したのとほぼ同時に死んだ人間しか召喚できないのです。」

なるほど…

あのタイミングで死んでしまったことは不幸中の幸いというわけか。

「この世界には元々3人の魔王がおりました。その魔王達は魔獣を従えて、人間を支配していたのです。」

「…元々…とはどういう意味ですか？」

「もう何千年も昔に、その魔王達は賢者に倒されました。そして、賢者は魔王達を結界により地中深くに封印したのです。」

しかし、ここ最近になつて、魔王達が復活したという知らせが届きました。」

魔王が復活した…？

そしたらまた、この世界を征服するんじゃないか？

「魔王が復活したのなら、すでにこの世界は支配されたのでは？」

俺はふと湧いた疑問を口にする、ソフィア様は静かに首を振った。

「いえ、この世界はまだ安全です。過去に賢者が張った結界がまだ残っている、魔王達は地中でしか活動できないからです。しかし、確実に結界は弱まっているのです。魔王達がいつ結界を破るか分かりません。」

ソフィア様は、拳を力強く握り、何度か呼吸をしてから口を開いた。「だから、あなた方には魔王が地上に出てくる前に殲滅して欲しいのです。」

この状況は、男ならみんな憧れるであろう。異世界に召喚され、魔法を使い、魔王を倒す。実際にクラスの男子達は盛り上がり、ゲームなどの呪文を唱えてみたりしている奴もいる。

しかし、俺は説明を聞いて、血の気が引いた。

「…タイムリミットが、あるということですか？」

タイムリミットがあるということは、十分な準備ができないという事をさす。それはデスゲームにおいては致命的だ。ましてや、この世界の自分達はそれなりに強い程度だ。そんな人間が、この世界を支配していた魔王に対した対策もせずに挑むなんて、折角拾えた命をまた

手放すようなものだ。

「はい、タイムリミットは長くて5年です。その為にもあなた方にはここで暮らしてもらい、厳しい訓練を受けてもらいます」

――

現在、6時過ぎ。

ソフィア様の説明の後、これから宴の準備をするということで7時頃まで自由時間を与えられた。

各自に与えられた自室で過ごすものや、外に出て行くものがある中、俺はいつものメンバーと大広間で談笑をしていた。結衣を除いて。

「なんか、こうやってみんな泊まるとかまじテンションあがるでしょー！」

戸部が襟足を掴みながら嬉しそうに言うと、姫菜もそれに賛同する。

「あー、確かにそうかもね。私、修学旅行はあんまり楽しむ余裕なかったから、実は今凄く楽しいんだよね。」

「それ言われると弱るわー。あの時は俺も周り見えてなかったっしょー。」

俺たちは、2年修学旅行での出来事を3年生になつてからだだが、話し合うことができた。戸部が姫菜のことを好きなこと、姫菜が今は付き合うつもりがないということ、そして…

俺が何にも出来ずに比企谷を頼ってしまったこと。

それからはしばらく俺たちのグループが気まずついてしまったが、以前よりも強い絆で結ばれている。比企谷にも俺たちは謝り、お礼を言ったがあいつは、

「俺は別にお前らの為にやったわけじゃない。…だが、今のお前らは…その…前みたいに薄っぺらくない。」

俺はそれを聞いて自然に笑みが溢れた。

冷たい空気が身体にしみる。俺は白い結晶を吐きながら、中庭のベンチに座り、天を見上げると、月は雲に隠れていた。

――俺は死んだ。

その事実を受け入れきれなかった。どうして俺なんだ。俺は今まで何度も人に失望をし、その度に自分を嫌いになったが、死にたいと本気で思ったことなど一度もなかった。これからも人並みの生活をして、人並みの幸せを手に入れたかった。小町とたくさん話してふざけあいたかったし、親父にもお袋にも親孝行をしてやりたかった。あのアラサー独身教師ともラーメンを食べに行きたかった。

気がつくと俺の視界は歪んでいた。涙が一筋、また一筋と頬を濡らすと、涙が止まらなくなった。俺は両手で顔を覆い、嗚咽しながら泣いた。

ふと、俺を温もりが包み込んだ。

俺は顔をあげ、横を見ると、雪ノ下が優しい笑みを浮かべ俺を抱きしめていた。俺は甘えるように泣きづけた。

――

どれくらいの間こうしていたのだろう。俺は涙が止まると、恥ずかしくなり雪ノ下から少し離れたところに座り直した。

「あら、もういいの？泣き虫谷君？」

顔が熱い…

「あなたが飛行機で撃たれた時、私は絶望したわ。だから墜落の直前は全く怖くなかったの。そして、目を覚ました時にあなたが無傷で目の前にいることが堪らなく嬉しかった。だから私はこの世界には意外と感謝しているのよ？」

雪ノ下は姿勢を直して俺の眼を真剣な眼差しでみつめる。

「それでも、ここにいたいとは思わない。あんな、姉さんだけど、私は姉さんに会いたいし、色々なことを経験もしたい。」

――それに、と彼女は続ける。

「あなたが帰りたいがっているのに、私が協力しないわけ無いじゃない。」

雲が動いたのだろう。月明かりが雪ノ下を照らす。その姿に俺は見惚れていた。

side 八幡

俺は雪ノ下と、宮殿の廊下を歩いていた。シャンデリアで照らされ、窓ぶちに使われている金が輝き、床には赤いカーペットがひかれ、奥まで続いている。幾つかの部屋を過ぎた所で俺たちは足を止める、木製のドアを雪ノ下はノックした。中から少女の声が聞こえ、暫くするとドアが開いた。

「由比ヶ浜さん、今いいかしら？」

由比ヶ浜は頷くと、俺たちを部屋に入れた。

木製のベッドに、1人用の机とイスがあるだけの簡素な部屋だ。

「先輩方は？どうしたんですか？」

ベッドに腰掛けていた一色が不思議そうな顔でこっちを見ている。「いや、少しお前らが気になってな…ってか、一色、お前泣いてたのか？」

一色の目が少し充血しているのを見て、何気なく聞くと

「ヒツキーのバカ！アホ！八幡！」

「いや、八幡は悪口じゃねえだろ！」

「あなたはもう少しデリカシーという言葉覚えてたほうがいいわ」

雪ノ下はこめかみに手を当てて首を振る。

「いいんですよ、結衣先輩、雪乃先輩。私、飛行機で先輩に二度と会えないと思ってしまったので、この世界で先輩に会えて本当に嬉しかったです。それで、ソフィア様の話が終わったら一気に気が抜けて。そしたら涙が止まらなくなってしまったんです。そんな、私を結衣先輩が部屋に連れてきてくれて涙が止まったところに先輩達が来たというわけです。」

ああ、俺は一色にこんなに大切にされてたのか。

一気に目頭が熱くなるのを感じながら3人を見ると、3人とも薄っすらと涙を浮かべていた。

「ヒツキー、もうああいうのはやめにしてね？」

ああいうの、というのは飛行機でのことだろう。

「ああ、すまなかつたな。ああいうのは、もうやめだ。」

いつかの日にも、同じ会話をした事を思い出す。だが、今回はあの時よりもずつと暖かく感じる。

「3人とも、聞いてくれ。」

3人の視線が俺に集まるのを感じる。

「俺はもう一度あの世界に戻りたい。頼りにさせてもらってもいいか？」

3人は笑みを浮かべながら、

「うん！ヒツキーまかせて！」

「あたりまえでしょう。貴方を1人にはさせない。」

「先輩はいつも1人でなんでもやろうとしますもんねー。まあ、大船に乗ったつもりでいてください！」

3人を見て、改めて俺は決意を固める。

「ーんなんとしても、元の世界にもどる。」

「ところで、デリカシー？ってなに？ゆきのん？お惣菜売り場？」

「そうね、由比ヶ浜さんには少し難しすぎるかもしれないわね。」

「なんかバカにされてる!？」

「馬鹿は死んでも治らないって本当なんだな」

「ヒツキー酷すぎだからあ！」

「ーーー」

俺たちは宴の会場である食堂に入ると、思わず感嘆の声が漏れた。天上には大きなシャンデリアがいくつも下げられ、長机には白いテーブルクロスがひかれており、その上には豪華な料理が並べられていた。

おい、一色、よだれたれてんぞ。

奥には、俺たちの長机と直角になるようにもう一つの長机が置かれており、鎧に身をまとった男たちが真ん中のソフィア様を挟むように座っている。全員が席に座ると、ソフィアは立ち上がった。

「あなた方がこの国に来られた事を祝して、宴を開かせていただきます。今夜は存分に楽しんでくださいね。では、いただきますよ。」

――

俺はステーキを口に含みながら、周りの生徒を見ていた。戸塚や、川崎はいつも通りにみえる。暗い顔の生徒もちらほら見えるが、ほとんどは食事を楽しんでいるようだった。

――

宴から一夜明けて、俺たちは訓練場に来ていた。目の前には鎧に身をまとった男がいた。髪は青く、端正な顔だち、そして身長は180ほどの、女子の理想を具現化させた様な美青年である。当然の様にほとんどの女子は蕩けた顔で見つめていた。

「私の名はガイウス。君たちの戦闘指導を任せられた。いきなり戦闘訓練と行きたいところだが、まずは自分たちの力を知らなければならぬ。よって、一人一人の能力を見せてもらう。」

そう言うと、ガイウスは石版を取り出しそこに手を当てた。すると、空中に文字が現れた。

名前

ガイウス

職業

精霊騎士

魔法属性

炎

「職業とは、才能の程度を示していると思ってもらってかまわない。戦闘の適性は聖騎士、精霊騎士、騎士の順番で高くなる。本当は他にも職業があるのだが、魔力の高い人はほとんどこの3つのどれかだ。そして、魔法属性とは、自分の得意な魔法の種類で、鍛錬を積みれば他の属性の魔法だって使える様になる。」

ガイウスが石版から手を外すと、空中の文字が消えていった。その光景に周りは声を上げる。

「では、これから一人一人の前に出てきてもらい、能力を見させてもらう。まずはその金髪、前に来てくれ。」

葉山は少し緊張した顔で前に出てくる。一呼吸して、石版に手を当たてた。すると先ほどと同じ様に文字が浮かび上がり、それを見た周りからは歓声が上がった。

名前

葉山隼人

職業

聖騎士

魔法属性

光

まじかよ…

神は葉山にどれだけ優しいんだよ…

横で見っていたガイウスが感嘆の声を上げた。

「これは驚いたな。私は聖騎士なんて初めて見た。正直、伝説上しか存在しないのではと思っていたほどだよ」

葉山はそれを聞くと嬉しそうな顔をして、こっちを見た。

…お前、俺のこと好きすぎだろ。

「では次、その長髪の女性。」

ガイウスが雪ノ下を呼ぶと、雪ノ下が前に歩いていき、手をかざした。

名前

雪ノ下雪乃

職業

精霊騎士

属性

氷

流石、氷の女王ですね。

雪ノ下は、かなり悔しそうな顔をして元の場所に戻って行った。
ゆきのん、葉山に負けて悔しいのん？

—————

それから次々と呼ばれていったが、ほとんどが騎士であった。俺の知り合いは以下のようになった。

戸塚 風属性 騎士

戸部 火属性 精霊騎士

海老名さん 氷属性 騎士

あーしさん 炎属性 騎士

川なんとかさん 風属性 騎士

一色 風属性 騎士

由比ヶ浜 光属性 騎士

先ほどから見ていて気づいたのだが、光属性が異常に少ない。きつとレアなのだろう。

意外だったのが、戸部が精霊騎士だったことだ。

あ、でもやつぱりどうでもいいや。戸部だし。

最後に俺の名前がガイウスに呼ばれた。最後の1人という事もあって、普段ぼっちの俺もそれなりの注目を集める。

やだなあ、これでどうせ俺も騎士でみんなから空気読めないやつと思われるんだろうなあ。

俺は前になると、気だるげに石版に手をかざす。そして文字が表示された瞬間、どよめきが起こった。

名前 比企谷八幡

職業 暗黒騎士

魔法属性 闇

…はい？

暗黒騎士ってなんだ？

そもそも、魔法属性も今まで闇なんてものはなかった。

つまり俺は能力でもぼっちなのかよ…

俺がこの世界の仕打ちに対して悲しみに暮れていると、ガイウスが血相を変えてこちらに来た。

「これは…どういう事なんだ？」

俺はその質問の意味がわからず顔を傾けると、ガイウス他の生徒の方を向いた。

「今日はここまでにする。明日からは本格的に訓練するのでそのつもりでいるように。それでは解散！葉山は私たちについて来い。」

みんなが固まってこちらを見ているなか、俺はガイウスに引っ張られて宮殿に連れて行かれた。

――

俺は葉山の隣に座らされており、正面にはソフィア様とガイウスが座っている。訓練場を後にした俺たちは、客間に連れて来られた。白い暖炉の上には、貴族の服に身を包んだ男の肖像画が飾られており、床はチョコレート色の絨毯がひかれ、真ん中には机を挟んで高級感溢れるイスが2つずつ置かれている。

ガイウスは俺たちを交互に見ると、ゆっくり話し始めた。

「過去に魔王を倒したと言われる賢者だが、実は2人いたんだ。片方は聖騎士だった。その聖騎士は、魔王を倒した後に人々から賞賛され、国の王となった。だが、もう1人の賢者は魔王を倒した後姿を消した。そしてこの賢者の資料もなぜかほとんど残っていないので、詳しい事は分からない。ただ、資料にはこう記されていたんだ。

――暗黒騎士だった。

と。」

ソフィア様がガイウスの後に続ける。

「暗黒騎士が何を意味するのかは定かではありません。しかし、あなた方が賢者達と同等の存在になり得る事は確かなのです。なので、特別措置としてあなた達はガイウスに1対2で指導してもらいます。」

葉山が一瞬顔を引きつらせる。

…ああ、つまりこれは、俺たちはシゴかれるという事だな。

そうして、俺たちの地獄の毎日が始まった。

第5話

side八幡

この宮殿には大きな図書館があり、世界中の本が集められている。薄暗い館内には幾つかの机があり、本を読むための小さな照明も付いている。

「おい、お前ら、寝るんだったら部屋に行けよ。」

船を漕いでいる2人を起こすと彼女達は立ち上がる。

「じゃあ、お言葉に甘えてお先に寝させてもらいますね。おやすみなさい先輩方。」

「ヒツキー、ゆきのん、おやすみー」

由比ヶ浜と一色はフラフラしながらも図書館を出て行った。

「お前も無理しなくていいんだぞ？もともとお前らは強制じゃないんだから。」

「いやよ。貴方と葉山くんに遅れを取るなんて私のプライドが許さないわ。」

そう、俺と葉山の特別メニューの中には勉強も含まれているのだ。

他の生徒の訓練でも朝から夕方まで体力、戦闘技術、勉強を叩き込むため毎日かなりハードである。しかし、俺と葉山はまだ他の生徒が寝ている早朝から夕飯の前までに体力と戦闘技術を磨き、夕飯後は決められた範囲を頭に叩き込まなければならぬ。文字通り死に物狂いでこの3ヶ月を過ごしてきた。しかし、何故か一色や由比ヶ浜、それに雪ノ下も俺たちと同じような訓練を自主的にやろうとしている。「それに、貴方は私達を頼ったのだから、私達もそれに応えないと。」俺は彼女のその言葉がたまらなく嬉しかった。

――

いつものように訓練を終えた日の夜、いつもならソフィア様の言葉をもらってからご飯を食べる。しかし、今回はガイウスが前に立ち、みんなは不思議そうにガイウスを見る。

「みんな、今までよく頑張った。明日は実際に魔獣を倒しに行く。今日は明日のために、英気を養ってくれ。それでは、乾杯。」

ガイウスの言葉を皮切りに、ご飯に手をつけ始める。

――魔獣か…

魔王はすでに地下深くで活動しており、地中には魔王を最下層として何層かの迷宮が存在するようだ。その迷宮に生息するのが魔獣――魔王の魔力により誕生した生物――らしい。すでに4層までは探索されているらしく明日俺たちはその4層に行くらしい。

生徒の顔を見ると、男子も女子も嬉しそうな顔をしている。きつとこれまでの訓練の成果を試したくて仕方ないのだろう。

訓練が始まった最初は、ほとんど生徒の目はが死んでいた。あの戸塚でさえ目が死んでいた。まるで俺のように。

…そんな戸塚をみて、俺と戸塚の子供を想像したのは内緒だ。

――

俺は集団の最後尾を歩いている。迷宮に入ってから、何体かの魔獣と遭遇しているがほとんどが他の生徒が一撃で倒しているので、やる事がなく、俺は後ろをついて歩いた。

天井は高く、壁も大きい。そして、道幅も集団で歩いても余裕があるほどだ。壁は青黒い石できており、その石が怪しく光っている。幻想的ではあるがどこか不気味さを感じるほどである。

しばらく歩いていると突然、前の人が足を止めるので、俺もそれに合わせて止まるとガイウスが声張り上げた。

「この先には広い空間があるが、そこにはいくな。5階への階段を守る魔獣がいる。君たちなら倒せるかもしれないが、危険が伴うからな。だから、この先に行かないようにして、この層の魔獣で実戦経験を積んでくれ。よし、それでは自由に戦ってくれ。」

その声を聞くと集団はわらわらとばらけ、それぞれが自由に魔獣を狩り始めた。

「はちまん！僕たちも行くこう！」

「ええ、そうね、貴重な実戦経験をするためには少しでも多くの魔獣と

戦わないといけないのだし。」

「ああ、そうだな」

俺は戸塚に腕を引っ張られて、その場を後にした。動こうとしない、ある男子生徒のグループを俺は特に気にしなかった。

――

暫く歩くと、俺たちは魔獣と遭遇した。骸骨なのだが、深くマントをかぶっており、時折マントの隙間から見える鎖骨の奥には心臓が脈打っている。俺たちを見つけると由比ヶ浜に掴みかかろうとした。

「ゆきのん！お願い！」

「はあああああ！」

由比ヶ浜が剣を振り上げ、骸骨の両手を真上に弾くのと同時に骸骨の全身を凍らせた。雪ノ下の魔法だ。

両手を挙げ間抜けな体勢で凍っている骸骨の心臓に向かって由比ヶ浜が剣を突き刺すと、地面にドス黒い血を撒き散らし骸骨は倒れた。

…グロいわ！

「やったねゆきのん！」

「由比ヶ浜さんの剣技のおかげよ。」

由比ヶ浜は雪ノ下に抱きつき百合フィールドを展開していた。

「なあ、お前らは…その…グロいのか大丈夫なのか？」

「え？ああ、なんか、あまりにも魔獣が現実離れしすぎててなんとも思わないかな。」

「そうね、私はそもそも血が苦手とかはないから問題ないわね。」

「先輩ビビリすぎですよー。こんなのゲームだと思っちゃえばいいんですよー！」

…女性陣つよし。

俺は縫るような目で戸塚を見ると

「僕、少しくらいの憧れてたんだ！」

俺はこの時初めて戸塚に恐怖を覚えた。

それから3体ほど魔獣を倒したところで、俺たちは一旦休憩することにした。雪ノ下と一色が作ってきたサンドウィッチを頬張りながら戦闘談義に花を咲かせていた。

「雪ノ下さんの氷魔法、やっぱりすごいね！みんな凍っちゃうだもん」
「そんなことないわ。本で読んだのだけど、この魔法は高位の魔獣になるほど効かなくなるらしいわ。それに、魔法って結構疲れるもの。」
「へー、お前の魔法にも欠点があるんだな。そういえば由比ヶ浜はどんな魔法なんだ？」

「あたしのは回復魔法。だから、あんまり戦闘向きじゃないみたいなんだ。」

「でも、回復魔法なんて僕他に見たことないよ？」

「たしかに、わたしも結衣先輩以外は見たことありませんねー」

ちょうどサンドウィッチも食べ終わり、腰を上げようとした時、つんぎくような男の悲鳴が迷宮に響いた。

side男子高生A

ガイウスは言っていた。

「階段を守る魔獣も俺たちなら倒せると。」

俺たち4人は道中で出くわした魔獣も一撃で倒してきた。そんな俺たちが4層程度の魔獣に負けるわけがない。それにヒキタニとかいう奴が特別に扱われることに不満を持っていた俺たちは4人でその魔獣を倒して名を挙げようと考えていた。

大きな広間に出るとその奥に一体の魔獣が胡座をかいて座っていた。全身の体毛は黒く、山羊のような顔には上に向かってはいるが先端に行くにつれて下に反っている二本の角が生えている。背中には天使を彷彿とさせる白い羽が生えており、白いローブを着ている。その魔獣は脇に杖のようなものを抱えながら本を読んでいた。

俺たちは剣を抜き、少しずつ魔獣と距離を詰める。あと1メートルというところで、俺は唾を飲み込む。

――そして、一斉に斬りかかった。

第6話

sideガイウス

私が少し目を離している間に、悲劇が起こった。私は男声のものと思われる悲鳴のする方向へ走る。ああ、こっちは行くなといったのに…！勝手な行動をする人たちに腹を立てていたが、広間に出ると私は言葉が出なかった。山羊の頭の魔獣が4つの玉でお手玉をしていたのだ。しかし、私が絶句したのはお手玉をしている事ではない。そのお手玉とは、

——生徒の頭だった。

私は我を忘れて魔獣に向かっていった。

side八幡

声のする方向へ走っていると、途中で葉山と合流した。

「今の声、あの広間からか!？」

「ああ、たぶんな！」

「間に合うといいが…」

広前へ抜けると、ガイウスが魔獣と戦っていた。魔獣は杖のようなものの先きで突きを放ち、ガイウスはそれを剣でそらすのが精一杯であるように見える。防戦一方だ。

「葉山！お前は後ろからあの魔法、撃てるか？」

「ああ、あれだけ練習したんだ！やってみせるさ！」

「分かった。あとで合図をくれ！俺はガイウスのところに行って時間を稼ぐ！」

葉山はそれを聞くと、右手を前に出し詠唱を始める。俺が走ってガ

イウスの元へ行くと、魔獣は俺の頭に向かって左手を薙ぎ払うように振った。間一髪でしやがみそれを避ける。

2対1に持ち込んでも魔獣の手は緩まず、俺たちは身体を右へ、左へと捻り、ときには上に飛び、何とか攻撃をかわすが、少しずつ体力が奪われていき呼吸も荒くなる。

クソ、このままじゃジリ貧だ！葉山はまだかよ!?

魔獣が拳を俺に降り下げる。サイドステップで避けようとしとき、

「ーッ!?!」

体力の限界か俺は足を持つらせた。正面には魔獣が拳を振り上げている。俺は腹に強い衝撃をくらい後方に吹っ飛んだ。

「比企谷!?!」

ガイウスと葉山は声を上げる。

なんだこれ、めちやくちやいてえよ…

俺は何とか立とうと、剣を地面に刺し力を入れる。

そんな俺を見て葉山はさらにこう続けた。

「比企谷、よくやった!」

「ガイウス、横に飛んでくれ!」

その声に反応して、ガイウスが横に飛んだ。

次の瞬間、強烈な光線が辺りを包んだ。

光が消え、薄っすら目を開けると魔獣の右半身に円状の大きな穴が空いており、右腕は杖ごと消滅していた。

「ギャアアアアア!!?!?!?!」

魔獣が初めて悲鳴をあげたが、致命傷とまではいかないようだ。

魔獣は怒りに身を任せて左腕でガイウスを引き裂こうとする。

俺はまだ上手く立ち上がれない。葉山はすぐにガイウスの元に向かおうとするが、後方にいたためにタイムラグが発生した。魔獣の猛攻は先ほどよりさらに速度が上がっており、ガイウスもよけきれずにかすり始めた。

そして次の瞬間、

ーガイウスの右腕が宙にまった。

「あああああああ!!?」

さらに悲劇は続く。

魔獣の左腕が上からガイウスの左腕を切り裂く。

——鈍い音を立ててガイウスの左腕が落ちる。

文字通り棒立ちのガイウスに魔獣が手を振り降ろすと、甲高い金属音が鳴った。

葉山が剣で受け止めていたのだ。

「比企谷!!? 魔法を使え!」

俺は数回呼吸をすると、詠唱を始める。一気に身体が気だるくなるのと同時に俺の陰から無数の黒い手が飛び出し、魔獣を地面に押さえつけた。

「グルルルルアアア!!?」

地面でもがいている魔獣の前で剣を振り上げ、それを魔獣の首に叩きつけた。赤黒い血が噴き出し俺と葉山を染め上げ、魔獣は息絶えた。

「ガイウス!!?」

俺たちはすぐに倒れていたガイウスの元へ向かうが、ガイウスは返事をせず、ただ荒い呼吸を繰り返しているだけであった。

「由比ヶ浜を呼ぼう! あいつは回復魔法を使える!」

「分かった! 君は結衣をよんで来てくれ! 俺は少しでも止血してみる!」

この場は葉山に任せて、俺は由比ヶ浜を呼ぶために走り出すと、程なくしてこちらに向かっていた由比ヶ浜達と合流した。

——

「由比ヶ浜、どうだ?」

「もう命に別状はないと思う…けど…」

そう言って由比ヶ浜は腕のないガイウスから目を背ける。

「そうか…」

俺は由比ヶ浜の言葉の続きを敢えて聞かなかった。

由比ヶ浜達と合流してから、しばらくすると続々とクラスメイトが集まってきた。だが、泣き出すものや吐くものが出た。無理もないだろう。辺りには大量の血と、同級生の頭、そして首なしの胴体、極めつけはガイウスの両腕が床に散らばっているのだ。

俺は殴られた自分の腹も由比ヶ浜に治療してもらったあと、生徒達の死体の前で俯いていた葉山の元へ歩いて行った。

「葉山、お前、こいつらの名前分かるか」

「ああ、佐々木、佐藤、藤本、山田だ。明るいやつらだったよ…」

俺たちの初の実践訓練は4人の死者と1人の重傷者を出して終了した。

side 小町

「次のニュースです。沖縄への飛行機が墜落したテロについて、4人の元総武高生の死体が発見されました。佐々木さん、佐藤さん、藤本さん、山田さんです。他の総武高校生は行方不明のまま、依然として捜索は続けられるようです。」

お兄ちゃんが卒業旅行に行ってから一夜明けた。まだお兄ちゃん
は行方不明のままだった。

第7話

side八幡

4人の生徒の死亡、ガイウスの負傷。これらは宮殿の騎士達に精神的ショックを与えていた。ガイウスは宮殿の中でも最上位クラスの精霊騎士であった。そんなガイウスが再起不能の傷を負ったことにより、ほとんどの騎士は迷宮の探索をしたくないと。事実上、魔獣は俺たち転生組のみで倒さなければならなくなった。

心に傷を負った者は宮殿の騎士達だけではない。総武高校メンバーも1年近く一緒にいた人が殺されたということに恐怖を感じていた。次は自分の番なのではないかと。そんな恐怖が生徒の心をへし折るのに、そう時間はかからなかった。

あの日から訓練に主席するものは少なくなっていき、一週間がたった頃には半分以下となっていた。

そんな中、第5層の迷宮へ潜ることが決まり全生徒が会議室に集められていた。俺を真ん中に一色と戸塚と川崎、奉仕部メンバーが座っており、向かいの机には葉山グループが座っている。

沈黙した重い空気のなか、ソフィアが口を開く。

「まず、ガイウスの証言で分かったのですが、第4層の山羊の魔獣は上位悪魔で今までの魔獣より格段に強かったです。便宜上、階段を守る魔獣の事は番獣と呼びますが、これからは番獣には十分に気をつけてください。」

そして、とソフィアは続けた。

「第5層には、今から3日後に行っていたいただきます。この層にいる魔獣は騎士達が調べてくれたので確認してください。」

ソフィアの隣に立っていた騎士が、一枚の紙を配っていく。そこには、様々な魔物の絵と特徴が描かれており、1番下には第5層の地図と思われる絵が描かれていた。

全員に紙が渡り、ソフィアが口を開こうとした時、

「ふっぎけんな!!?もう付き合ってられるか!こんな奴らと戦うな

ら、あの時死んだほうがましだ！」

1人の男子生徒の怒号が響く。一色は身体をビクツとさせ、俺の袖を掴んだ。まもなくして、1人の生徒の怒りは他の生徒にも伝染していった。

「そうよ！勝手なこと言わないでよ！」

「もう、元の世界に戻してよ！」

「俺たちをこれ以上戦わせるならあんたを殺す!!？」

俺たちと、葉山達を除いてほとんどの生徒がソフィアに好き勝手なことを言っていく。自分の要求を突きつけるもの、不平不満を口にするもの、なかには暴言を吐くものもいた。一色は怯え、由比ヶ浜は俯き、雪ノ下は目を瞑っている。そんななかでも、葉山はみんなを落착かせようと動くが、その声は喧騒のなかに埋もれていく。

まずいな…。今の俺たちには時間がない。この迷宮の深さもわからないなか、立ち往生をしている余裕など俺たちにはないのだ。しかし、今のままでは迷宮に行こうとする者など現れるはずもない。番獣はともかく、他の魔獣はできるだけ大勢で倒すのが早いだろう。だから、迷宮に行く者の数が減るといふ事はそれだけクリアに時間がかかり、命を落とす危険が増えるのだ。

俺はゆっくり立ち上がると、机を思いっきり叩く。雪ノ下達が怯えた表情で俺を見るが俺はなるべく目を合わせないようにし、口を開く。

「うるせえんだよ。お前らは泣くことしか能のないガキかよ。」

生徒達は呆然とした顔で俺を見るが、俺は不敵に笑ってゆっくり歩き出す。

「死んだあいつらなんてな、自業自得なんだよ。人の話を聞かないで、自分ならできると思い上がっていた。だから命を落とした。」

俺は反対側の葉山達の側になると、そこで立ち止まる。

幾つもの視線が刺さり、鼓動が速くなっているが、俺はそれを顔に出さずにつづける。

「俺から見たらお前達だって、あいつらと同じなんだよ。人の話を聞かずに自分のしたいようにする。つまりな、邪魔なんだよ。お前らな

んで、いらぬ。俺の足を引つ張られても困るしな。」

「ーそれに、と続けようとしたそのとき

頬に強い衝撃が走り、俺は壁を背に尻餅をつく。口にじんわりと鉄の味がにじむ。

「少し黙れよ、比企谷」

葉山が俺の前にたち、睨みつける。

「君は今、冷静じゃない。少し頭を冷やしてこい。それと戸部、傷の手当をしてくれ。」

戸部はサムズアップをして、俺の肩担いぎ、出口に向かって行った。葉山とすれ違うときに葉山は俺にしか聞こえないような声でつぶやく。

「すまない。君の手を借りることになって。ここからは俺に任せてくれ。」

別にお前の為じゃねーよ、バーカ。

「ー」

俺は今、戸部と宮殿の庭のベンチに座っている。そう、あの俺の黒歴史ベスト5に入るといわれる、雪ノ下の胸のなかで大泣きする事件の現場だ。

戸部は俺を手当てしたら、会議室に戻るのかと思っていたのだが

「ヒキタニ君、ちよつと話さね？」

と言われ、庭に連れてこられたのである。え、こいつと俺って友達なの？ いや、でも、3年になってからヤケにこいつ絡んでくるんだよなあ。それから俺もこいつを気にとめるようにはなつたし。この気持ちって、恋？ そういや、友達以上恋人未満ってなんかいやらしいよね。

「ヒキタニ君さー、またアレやったでしょ？」

俺が脳内恋人友達論争に浸っている中、戸部は空を見上げながら唐突に切り出した。

「アレってなんだよ。代名詞だけの会話が俺と成り立つと思うんじやねえよ。そういうのは夫婦でやれよ。」

「たからさ、自己犠牲つてやつ？俺はバカだから難しい事とかわかんない。だけどさ、ヒキタニ君が何かを必死に守ろうとしてるのだけは分かったんだ。」

戸部は依然として上を見たまま、続ける。

「俺にも守りたいものがあるだわ。4人も死んじまったときは怖くてしかたなかった。いつか俺も死んじまうのかなーって。でも、海老名さんの顔を見て思ったんだ。1番怖いのは海老名さんが死ぬことだって。」

戸部は俺の顔をみる。その眼はいつもの戸部とは思えないほど真剣で凜々しかった。

「だから、俺は海老名さんを守りたい」

俺は以前、こいつらの関係を欺瞞だといった。しかし、今のこいつの顔を見てもう一度そんな事を言えるだろうか？

「つまりさ、何が言いたいかっていうと、俺はヒキタニ君の味方だから！」

戸部は最高の笑顔でサムズアップした。

side 葉山

比企谷が退出したあと、俺は声を張り上げた。

「みんな、聴いてくれ。怖いのは分かる。だが今動かないとどのみち俺たちは殺されるんだ。」

みんなは、暗い表情で俯いており、俺は努めて明るい声を出す。

「だからこそ、みんなで力を合わせて魔王を倒そうじゃないか！番獣と戦えない者は戦わなくてもいい。一人一人が自分のできる事をやっていこう。」

しばらくの静寂の後、何名かの男子生徒がぽつり、ぽつりと言葉を漏らす。

「ああ、そうだな！」

「俺は隼人君についてくよー！」

そこから、派生するように指揮が高まっていく。何名もの女子生徒からの熱い視線を感じるが、今回はそれも利用させてもらおう。

「女子達も、俺に力を貸してくれ。」

俺は女子一人一人に目を合わせていく。

「私、がんばる！」

「葉山君のためなら何だってできるよ！」

会議室は先程までの沈黙が嘘のように盛り上がっている。これはきっと比企谷への対抗心もあるのだろう。

ふう：何とか仕事を終えられたな。

優美子から冷たい視線を感じるが、後で謝っておこう。

第8話

side八幡

戸部と別れた俺は何冊もの本を図書館から借り自室で読み漁っていた。

「この本にも書かれていないか…」

俺は読み終わった本を閉じ、表紙をぼんやりと見つめる。

――魔法属性と魔法

俺はこの世界で沢山の本を読んだのであらかたの魔法の効果は分かる。例えば、山羊の魔獣との戦いで葉山が使った魔法は光属性の上位魔法である。その破壊力は凄まじく、光線に当たったものを消滅させる。だが、使用者の負担も大きく葉山でも1発が限度らしい。さらに、詠唱にかなりの時間を食うので前衛では使う事ができない事もネックだろう。

しかし、俺の魔法――闇属性魔法――はどの書物にも書かれていないのである。だから、俺が使える魔法は最初から感覚的に使えた魔法しか知らない。山羊の魔獣に使った影の魔法もその一つであるのだが、影を操る事は予想以上に難しく細かい動きはいまだにできない。

俺が別の本に手を伸ばそうとすると、ドアが勢いよく空いた。

「比企谷君！」

「ヒツキー!!?」

息を荒げた由比ヶ浜と雪ノ下が立っていた。

「失礼します……」

その後ろから一色も申し訳なさそうに顔を出す。

「会議室のこと、説明してくれるわよね？」

――

「ヒツキーもうやらないって言ったじゃん！」

「何か、申しひらきはあるかしら？」

「あはは…」

俺は今絶賛土下座中である。由比ヶ浜と雪ノ下は俺のベッドに座

り、一色は相変わらず気まずそうに俺の椅子に座っている。

俺の見たものが土下座したくなるような土下座を目の当たりにし、雪ノ下はこめかみを押さえながら言う。

「あの場で貴方があややった事は間違いだとは言わないわ。実際にあの後みんながやる気になったのだし、そこは素直に認める。だけど、貴方のやり方を見てると胸が痛いのに。」

由比ヶ浜は悲しそうに俯き、俺はいたたまれなくなり、視線を床に移す。

でもね、と雪ノ下は続ける。

「私達も、貴方のやり方を否定するだけではダメだと思ったの。私達は肝心な時にいつも頼ってきた。そして、その度に貴方のやり方を何度も否定した。そんな事はもうやめよ。」

目頭が熱くなるのを感じながら、ゆっくりと顔を上げる。由比ヶ浜は俺の目を見て、優しく微笑み、子供をあやすような声で話す。

「これからはヒツキーが傷ついたなら、その傷をあたし達にも共有しよ？それでも辛かったらあたし達がヒツキーの傷を癒し続ける。だからね、もう1人で傷つかないで。」

涙が腐った瞳からこぼれるのを感じた。

――

あれから一夜明けた午前、俺たちは訓練場で汗を流していた。会議室の事で気に障った生徒が何かを仕掛けてくると思っていたのだが、嫌な視線を感じるものの、未だに実害はなかった。それはおそらく、こいつらのおかげだろう。

「つべー、隼人君、マジ強いっしょー。俺本気でいったのに、一撃も当たられなかったわー。」

「いや、かなり危なかったよ。何発かかすつたしね。」

「隼人ほんと強いねー。聖騎士だっけ？あーしも頑張らないと。」

「でも、とべっちもかなり動き速かったよ。濃厚な男同士のぶつかり合い。はやとべ、キマシタワー!!？」

「擬態しろし。」

なぜだかあの後以来、俺の周りにいるのだ。てか、海老名さんこの世界でも腐女子は健在なんですね。

第4層以来、訓練場は葉山が指揮するようになった。番獣を倒したことで、その人間性が評価されたからだそうだ。

俺は今、一色と雪ノ下の模擬戦を見ていた。

一色の突きを雪ノ下が体を捻ってかわすと、次は雪ノ下が右上から斜めに振り下ろす。一色は体勢を低くすると、横に転がりすぐさま立ち上がる。一色が体勢を立て直す前に雪ノ下は突きを放つ。

――勝負あり。

木刀は一色の胸の前で止まっている。

「ふっ、私の勝ちね。」

嬉しそうですね雪ノ下さん。

「あー！雪乃先輩は本気出しちゃダメって言ったじゃないですかー！」

一色はぶくー、と頬を膨らませる。あざと可愛いなおい。

「でも、一色もかなり運動神経あるのな。」

「そうですよ。わたし、ほとんどの事は人並み以上にはできるんで。」

たしかに、こいつって結構ハイスペックなんだよな。

――

午後7時前、俺たちは風呂を済まして食堂に向かう長い廊下を歩いていた。

「僕もうお腹ぺこぺこだよー。」

「そうだな、俺もお前を食べちゃいたい。」

「え？」

「ああ、すまん間違えた。そうだな、あれだけ動けばお腹も減るよな。」

あまりにも戸塚が可愛すぎて俺が魔獣になるところだった。ぐへ

へへ……

背後から雪ノ下達の冷たい視線を感じるがモーマンタイ。

「今日はどんな飯かな？」

「んー、どうだろうな。でも何かあるわけでもないし、あまり期待はしないでおく。」

この宮殿で騎士達に支給されるご飯はあまり贅沢とは言えない。騎士道を重んじるとかであえて質素な食事となっているようだ。さらに大缶や小缶などの食事を自分たちで盛っていくため、まさに学校給食を連想させる食事である。特別な日にはかなり豪勢になるが、今日はこれといったことがないのでいつも通りの食事だろう。

食堂の大きな扉を開けると戸塚は小さく声を上げた。

「わあ、今日はもうみんなの分の食事を配ってくれたんだね」

いつもなら自分で取りに行くのだが、今日は全員の席に既に食事が用意されていたのだ。

「わざわざ疲れているのにこんな事をしてくれるなんて、物好きな人もいたものね。」

「まあまあ、ゆきのん。わざわざ準備してくれたんだから素直に感謝しようよ。」

俺たちが自分達のネームプレートがつけられている席に座ろうとした時、前を歩いていた戸塚が足を止める。

「八幡の分がない……。」

そこには丁寧に俺の食事だけ置いていなかった。周りを一瞥すると、にやにやしている生徒の中に悪意を持った目で俺を見ている生徒がいた。

――相模だ。

おいおい、18歳の奴らがやるようなことかよ。

俺はため息をつき、自分の食事を盛りにいき、大缶を覗き込む。

カラだ……。

大缶だけではない。小缶もからであり、白米もなくなっていた。

まじかよ……これは下手な暴力よりもよっぽど効くぞ……。

厳しい訓練を終えた日の夜であり、みんなかなり腹を空かしているだろう。なので元々騎士道を重んじて量を少なくしているこの食事を他の人からもらうわけにもいかない。

手詰まりだな……。さっさと寝て飢えをしのぐか。

食器を戻し食堂の扉に向かおうとすると後ろから声をかけられた。

「まちなさい、飢えしのぎ君」

「いや、もう名前の原型残ってないから。」

振り向くと雪ノ下が食器を持って立っていた。

「私の分を分けるわ。」

「いや、いいよ。お前だって腹減ってんだろ？」

「あら、私って細いからこんなに食べないのよ。」

そういうと、雪ノ下は自分の席に戻っていき自分のご飯の半分をよそおうとする。

「あー、ゆきのん！それ多すぎ！あたし達がヒツキーにわかる分も残しておいてよー！」

「先輩、私もダイエツト中なので少し食べてくださいね！」

由比ヶ浜と一色も俺の食器にご飯を分けていく。

「はちまん！僕の分も分けてあげる！」

「私もこんなにいらない」

そう言って戸塚と川崎が後に行く。

「みんなすまない。俺なんかのために。でも、礼を言わせてくれ。ありがとう。」

俺は胸の中が熱くなるのを感じながら自分の席に戻る。

相模は目があうと苦虫を噛んだような顔をしていたが、俺は無視して席に座った。

「比企谷、俺のもやろう。」

「ヒキタ二君、俺の分もあげるっしょー」

「ヒキオは男なんだからいっぱい食べるし」

「私もヒキタ二君にあげるよ。」

「まてまてまて！多すぎるわ！」

第9話

side八幡

第5層へと潜る前日、再び会議室に集まっていた。

「迷宮では番獣との戦闘が1番大変なのは分かってくれると思う。だが、番獣との戦い中に他の魔獣が乱入してくると余計戦いづらくなる。だからこれからは迷宮では2つのグループに分けて行動してもらおう。番獣討伐隊と、それ以外の魔獣殲滅隊だ。」

葉山はホワイトボードに二つの部隊の名を書き、説明を続ける。

「番獣討伐隊はできるだけ体力と魔力を温存する為に他の魔獣との戦闘は避けてくれ。その為に、魔獣殲滅隊にはできるだけ多くの魔獣を倒してほしい。」

それから葉山は一人一人の意見を聞きホワイトボードに書き込んでいった。

魔獣討伐隊は俺、葉山、雪ノ下、由比ヶ浜、一色、川崎、戸塚、戸部、三浦、海老名さん、相模の11人だ。正直相模が名乗りを挙げるのは意外だったが、葉山もあまり気にした様子ではなかったので俺も何も言わず会議は進んで行った。

――

side葉山

心地よい静寂を破るのは足が水を掻き分ける音のみ。

この第5層に降りた時、俺たちは言葉を見失った。あたり一面には浅い水が張っており、樹々が道を作るように生い茂っている。天井は岩でできており、かなり大きい洞窟のようだ。天井から漏れる光が水面を照らし幻想的な光景が広がっていた。本来なら地中である迷宮に光が入り込むことなどありえないのだが。

それにしても歩きづらい。地面を踏みしめるたびに、足が泥に沈む。まだ一度も魔獣と遭遇していないのだが、みんなの顔には疲れが現れていた。この光景にテンションが上がっていた女性陣も既に口を開くものはいなくなっていた。地図とにらめっこして先頭を歩い

ていた俺は一度後ろを向き、みんなの顔を見ると励ますように声をかける。

「みんな、あと少しで番獣がいる広間に着く。その前まで行ったら一度休憩するから頑張って歩こう。」

そう言つて前を向こうとすると、結衣が声を上げた。

「わあ、凄く綺麗……」

前を向くと、段差のように2メートルほど下がっておりそこには紫色に発光する美しい花が咲き乱れていた。

結衣が走つて近寄ろうとするが比企谷が結衣の腕を掴んだ。

「さて、そこへ行くのはやめておこう。なぜあそこだけあの花が咲いているのか分からない。怪しいものには近づかないほうがいいだろう。」

結衣は少し不満そうに頬を膨らませる。

「えー、でもこの先が番獣の部屋なんですよ？」

「ああ、でも他の道を通つてもいける。少し遠回りになるがそつちを行こう。」

俺も比企谷の意見に賛成だったので、踵を引き返し別の道を歩いて行つた。

――

side 八幡

番獣の広間の前で葉山は足を止める。

「みんな、今から休憩時間とする。30分後にまたここに集まってくれ。」

俺たちは服が濡れるのも気にせず倒れこむ。

「僕もうしばらく歩けないよ……」

「ああ、泥がここまで歩きづらいとはな……」

「ありや、ぜえ、ひきぎやや君。ぜえいぜえい、この程度で、ぜえ、へこたれるなんて、ぜえ、だらしないわね。」

「もういいから休めよお前。」

俺は腰につけていた水筒を取り出し一気に飲む。

「はあ、はあ、はあ。」

俺は呼吸を落ち着かせるとなんと周りを見渡す。すると移動中ずつと無言であった相模が1人で俺たちから離れていく。

1人でどこに行くんだ？

俺はなんとなく胸騒ぎがし、戸塚に一言言つて相模の後ろをつけていった。

――

side 相模

うちはあの綺麗な花畑の中にいた。地面は今まで以上にぬかるんでいて、動きづらいのだが私はそんなことを気にもせず花を手にとって眺めていた。

なんて美しいのだろう。

なぜだか分からないが、この花々に心が吸い寄せられるを感じる。

ふと、この花畑の中央に背丈の高い一輪の花が目に入る。この花だけは青色に発光しており、その存在は他の花と一線を画した。うちはその花へと歩いていき、そつと指で花弁に触れる。

その時、あたりに金切声が鳴り響く。

キイイイイ!!?

なに!?! なんなの!?

うちはパニックになりながらどこから音が鳴っているかを探す。すると、それはすぐそばにあった。

――この青い花だ。

この花は左右に激しく震えながら、なおも音を発生させている。

「ーッ!!?..うるさい!!?..」

腰の剣を抜きその花を切り落とすと音は止まった。しかし、周り光景に目を疑った。

何も無いのだ。

さつきまであたりに咲いていた紫の花も、目の前で切り落とした青い花も無くなっていった。うちは落ち着きを取り戻すのと同時に足に力が入らなくなりその場に座り込んだ。

葉山君のところに戻らなきや。

そう思い顔を上げると目があった。

「……」つ目の巨人がうちを見ている。

すぐさま元いた方へ戻ろうとするが、そこにも巨人がいた。

囲まれている。それも5体の巨人に。

前方の巨人が棍棒を振り上げるのをみてゆっくりと目を瞑った。

「……」

来るべき時を待っても一向にそれはやって来ない。恐る恐る目を開けようとすると、大きな水しぶきが上がりそれを追うように地響きが起こった。

side 八幡

俺は影からの黒い手を操り、巨人の首を捻りそのまま後方に倒す。

俺は巨人の股を走り抜けて、相模の元までいき相模の肩を揺する。

「相模！立てるか!？」

相模は俺を見ると、目に涙を浮かべながら叫ぶ。

「比企谷!!? お願ひ、うちを助けてよ!」

俺は一体の巨人の足を影の手で引っ張り転ばせる。

「俺がお前の逃げる時間を稼ぐ。だからお前は葉山達を呼んできてくれ!」

相模は顔を上げ、巨人が倒れているのを見ると俺の話を最後まで聞かずに走り出した。

「……」番獸がいる方へと。

違うそつちじゃない!

相模を止めるために声を出そうとするが、巨人の声にかき消される。

「ギヤアアアス!」

巨人は自分の獲物を取られたことの怒りか地面を揺らすほどの雄叫びをあげた。

くそ!!?このままだと相模が殺される!!?

今俺の目の前に巨人が2体、左右に一体ずついる。正面一体が大きく足を蹴り出すが、俺は全力で横に飛ぶ。それに続き、正面のもう一体が棍棒で薙ぎ払うのを何本もの影の手でなんとか受け止める。今度は右の巨人が棍棒を振り下ろすのをバックステップ間一髪かわす。ただでさえ5メートル以上ある巨人の攻撃に加え、かなりぬかるんでいる地面。それに先ほどから影の手を出し続けており、体力魔力ともに限界が近づいていた。

左の巨人が棍棒で薙ぎはらってくる。俺は走って避けようとするが、

ズブツ!!?

一部だけやけに深い泥に足を取られる。

まずい!!?

迫ってくる棍棒に対して目を閉じた。

「ーーツ!!?」

体に熱を感じた瞬間、凄まじい速度で樹木に叩きつけられ、その瞬間呼吸が止まる。

俺は力なく地面に倒れこむ。目の前の水が赤に変わっていくのを見て、かなりの傷を負ったことがわかった。もう痛みも何も感じない。

すると、俺の体が宙にぶら下がる。力なく視線を上にかかすと世界が反転していた。どうやら巨人が俺の足を掴み持ち上げたみたいだ。巨人は心なしか口元を歪めているように見える。

巨人が棍棒を振り上げた次の瞬間、全身に衝撃が走り俺は意識を手放した。

第10話

side 葉山

俺たちは番獣の広間の前に集まっていた。

比企谷と相模さんを除いて。

おかしい。比企谷は1人を好むが時間はしっかり守るやつだ。だが今こうして姿を現していないという事は何か面倒ごとに巻き込まれているのだろうか。

「ヒツキーとさがみんどこに行つたのかな？」

「さつき八幡が相模さんを追いかけて向こう行つたの見たよ」

背中に嫌な汗が流れるのを感じる。

比企谷は強い。それも、その辺の魔獣には負けなくらい。それは一緒に訓練した俺ならよくわかる。だが俺は底知れぬ不安を感じているのだ。

「よし、2人の行つた方へ向おう。」

しばらく戸塚が指をさした方へ歩いていると、大きな水の音が聞こえてきた。何か大きな物を水面に落としたような音だ。足速にその音をたどって歩いていくと俺は面を食らつた。

一つめの大きな巨人が比企谷の足を持ち、棍棒で殴り付けようとしていた。

何人かの少女が悲鳴を上げたようだが、その間にも俺の身体は自然と動いていた。

俺は呪文を詠唱し光の弓と矢を取り出すと弦を思いつきりひく。

間に合え!!?

放たれた矢は直線を高速で進んでいく。

ブスツ!!?

矢が巨人のこめかみを貫通すると、巨人は比企谷を離し後ろに倒れた。

「結衣！比企谷を頼む!!? 優美子と姫菜は結衣のサポートを!!?」

「隼人くん、俺たちは？」

「それ以外の人は残りの3体の巨人を倒すぞ!!？」

結衣たちが比企谷の元へ走っていくと、一体の巨人が結衣に棍棒を振り下ろそうとする。

刹那、巨人を囲うように無数の氷柱が宙に出現する。

「あなたたち、私の大切な人を傷つけ、さらに大切な友達までにも手を出そうとした事を後悔しながら死んでいきなさい。」

雪乃ちゃんが突き出している右手を握ると氷柱が巨人の身体を貫く。

巨人は立ったまま絶命した。

雪乃ちゃんが倒すのとほぼ同時に、俺の視界の隅に大きな火柱が上がった。

ギヤアアアアア!!？」

巨人は水辺にのたうちまわって何とか火を消すと、俺たちから逃げるように走る。

「逃がすわけないでしょ？」

戸部が右手を突き出して詠唱をする。

——巨人の眼から火柱が飛び出した。

巨人が膝をついて顔を覆うが、すぐにまた大きな火柱が巨人を包みついに動かなくなった。

戸塚というはを見ると、巨人と戦っていたがすぐに決着がついた。

2人が放ったカマイタチが巨人の首にあたり鮮血が噴き出したのだ。

巨人は倒れ、しばらく身体を痙攣させているがやがて死ぬだろう。

比企谷の元へ向かうと、比企谷は結衣に抱かれながら荒い呼吸をしていた。

「比企谷!!？」

結衣がしばらく治療魔法を唱え続けると比企谷は弱々しく眼を開けた。

「ヒッキー!!？」

結衣が抱きつこうとするが、比企谷はそれを手で止める。

「葉山：相模が1人で番獣の広間へと向かった…」

何だと：

俺は全身から血の気が引くのを感じながら走り出した。

俺の頭に最悪の未来がよぎる。

生きててくれ!!?

――

side 相模

うちはわけも分からず走ると、大きな広間に出た。相変わらず地面には水が張っており、周りには植物が生い茂っている。だが、今までと違うのはうちよりも大きな岩がそこらじゅうにおいてある。

ここにはあの巨人もいないから安全だろうし、ここにずっといよう。

うちは、もともと番獣なんかとまともに戦う気なんてなかった。参加すれば葉山くんの好感度が上がると思ったから参加しただけなのだ。だから後方支援とかいつて安全なところから少しだけ魔法を撃とうと考えていたのに、あんなめに会うなんて。

岩に寄りかかるように座ったその瞬間、

ザブンツ!!?

ん？何だこの音。

面倒くさいけど、身体を起こし岩から顔を出し後ろをのぞこうとする。

ドゴンツ!!?

大きな硬いもので殴られたような強い衝撃と共に前に吹っ飛ばされた。

水面に音を立て転がる。

わけも分からず後ろを振り向くと、そこにはまるで蟹を彷彿とさせる魔獣がいた。

4本の尖った足の上に人型の胴体、2本のハサミに牙むき出しの口。全身は刺々しい甲殻でおおわれている。

足元に転がる砕けた岩を見て理解した。

こいつ、岩ごとうちを殴った!?
どんな力してんの!?

うちは本能的にこの魔獣には勝てないと思い走り出す。

が、魔獣は8本の足を駆使して凄まじい速さで動き、ハサミの先でうちの襟を掴むと反対側に投げる。

瞬間、全身に衝撃が走り呼吸が止まる。

岩に叩きつけられたのだ。

うちが目を開けると、魔獣は腕を振り上げている。

剣を抜きすぐに魔獣に立てるが、全然魔獣の甲殻を破ることができない。

次の瞬間、鈍い音が頭を反響する。

え、ハサミで殴られた?

それも加減している。先ほど岩を砕くほどの力を目の当たりにしているのですのくらいわかる。

呆然としたまま顔を上げると、魔獣と目があった。魔獣は口元を歪めていた。

ー笑っていたのだ。

うちはまた魔獣に顔を殴られる。

人生で初めて顔を殴られたことに対するショックか、自然と涙が出てくる。

だが魔獣はうちの反応を見てさらに殴る速度を速めた。

あたりに血が飛び、魔獣のハサミも朱色に染まっているが魔獣は殴り続ける。

「いだいよお、だれが、だすげでえ」

泣きながら懇願したが、また殴られた。

何度も何度も何度も何度も何度も。